

【研究背景】

校庭の芝生化とは、小学校や中学校の校庭のサーフェスを芝生化しようという取り組みである。近年では、環境問題への意識の高まりや、こどもの体力低下への危機意識から、行政主導で公立小学校への導入が進んでいる。公立学校のうち、芝生化整備校は、平成14年度から平成19年度にかけて、865校から1492校に増加し、平成21年度には1746校になった。整備学校数の上昇からもうかがえるように、近年教育現場から注目されている校庭の芝生化については多くの研究がなされている。

【研究目的】

本研究では、学校校庭の芝生化が、生徒のみならず、地域住民に対しても、スポーツに対する意識の変化をもたらし、さらに運動実施意欲を向上させるということを明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

本研究では、校庭芝生化を実施したA小学校ならびに土のグラウンドのB小学校の学区に居住する中学生以上の住民を対象にしたアンケート調査を分析する。

【研究結果】

有効回答者数全体の分析から、校庭の芝生化は10～20代の地域住民の、運動セルフ・エフィカシーの一項目「少し疲れている時でも、運動をする自信がある」において、有意に影響を与えていることが本研究で明らかになった。また、⑤30代～40代⑥50代～60代⑦70代以上の地域住民については、校庭の芝生化によって運動セルフ・エフィカシーが有意に向上する世代は本研究からは確認されなかった。

【考察】

今回の研究で、10～20代の肉体的疲労時における運動への自信が上昇した要因について。

まずは、その小学校の卒業生である可能性が高いということである。10代～20代は、今回の調査小学校の地区に居住している可能性が高い。そのため、母校の校

庭の変化に反応したと考えられる。また、その卒業生であるという事実から、校庭を利用できる、校庭に気軽に入って体を動かせるという安心感もあったのではないかな。

そのような結果として芝生化という環境の変化が個人を刺激し、運動に対する自信も向上したのではないかな。

本調査の結果からは、学校の校庭の芝生化が運動セルフ・エフィカシーの向上に対して有力だと判定できる有意差が一項目のみしか示されなかった。しかし、芝生化された校庭が地域住民の間で十分に活用され、機能を發揮していない可能性として以下の2点があげられる。

1：芝生化されてから調査実施までの期間の短さ

本調査では芝生化される以前の1回目の調査から、芝生化された後の2回目の調査までの間隔が約3ヶ月であった。3か月という期間が、地域住民が芝生化された校庭に親しみをもち、地域に存在が根づくのに十分でなかった可能性がある。

2：校庭が一般開放されていない点

芝生化された校庭は一般開放されておらず、実際に利用することができるのはA小学校の生徒に限定されている。つまり芝生化された校庭のメリットを直接享受できる住民が今回の調査対象には含まれていないということである。このことが今回の調査における結果に影響した可能性が考えられる。

以上の2点から、芝生化された校庭の活用法を変え、長い期間をかけて地域に根差すことによって違った結果が得られるかもしれない。本調査の期間を考慮すると、芝生化という環境の変化が、運動したい、運動してみようという感情に対してはたらきかけるのに十分な時間がなかったとも考えられる。そのため、本調査においては上昇が確認されなかったものの、校庭の芝生化が完全に環境の変化と運動してみようという感情に対して働きかける効果がないとは判断できないだろう。